

オープン研究会報告

2012年度より、教育・福祉研究センター主催の学内研究会を「オープン研究会」という名称で開催している。その目的は白梅学園における研究の活性化、特に異分野・異業種間の研究交流による創造的研究の発展である。研究センター運営委員内では松本園子が担当し、2014年度は多喜乃亮介氏（発達臨床学科）、西方規恵氏（家族・地域支援学科）にオープン研究会運営委員として協力をいただいた。

2014年度は下記のように3回開催され、通算15回となった。

第13回 2014年6月3日（火）

報告 金子尚弘（発達臨床学科）

テーマ マウスが教えてくれること

第14回 2014年7月15日（火）

報告 小松歩（保育科）

テーマ 「遊び心」をはぐくむ保育・子育て
～白梅幼稚園の実践をもとに～

第15回 2014年11月4日（火）

報告 中島好伸（子ども学科）

テーマ ドライサー研究——短編小説の手法
と内容

毎回興味深い報告がなされ、研究会後、運営委員が記録をまとめ、学内各構成員にメール添付で送付し、不参加者も成果を共有できるようにしてきた。また、学園ホームページへの掲載もはじまった。各回の報告概要は以下の通りである。

（松本）

第13回 金子報告「マウスが教えてくれること」

金子氏の研究分野「動物心理物理学」は、動物を対象とする精神物理学（外的な刺激と内的な感覚の対応関係を測定しようとする学問）であり、

近年はもっぱらマウスをつかっている。一般的に測定の内容は、活動量、身体能力、感覚・知覚・認知、知能・認知能力、行動特性・人格・情動、記憶力、学習能力等である。マウスでも、これらのほとんどを測定することができる。

心理学における動物実験は、ヒトの知覚や学習を科学的に捉えるために不可欠な手法で、弁別や一般化など、学習の基礎的な過程を科学的に説明するために、様々な行動実験を試みてきた。また動物の感覚・知覚の能力を測定して、個体間の比較や、個体の経時的な変化をみる実験も行った。動物をつかう利点は、実験条件、環境要因の統制が可能であること、個体差が少ない、最近では遺伝子操作が可能となった、世代交代が早い、ヒトより学習が遅いことが多い、粗食でも健気に頑張ってくれる、ヒトは本人にそのつもりがなくても嘘をつくが、動物は嘘をつかない、失敗は全て実験者の責任であること、等である。

動物（マウス）研究の方法

○性差 従来はオスのみを使っていたが、長寿研究では性差が重要なことも分かってきた。ここ十数年はメスも使うようになった。

○系統差 20世代ぐらい近親交配させた「近交系」やミュータント（突然変異体）が用いられる。

○遺伝子工学 最近では遺伝子操作によりつくられたノックアウトマウス、トランスジェニックマウス用いて、統合失調症、うつ、ADHDなどの行動を示すアニマルモデルの研究が盛んである。

○年齢差（ライフスパン） 長寿の研究では、長期の行動測定も必要である。

行動分析学は人間その他の生物の諸活動を、環境と個体との相互作用という側面から探求する

学問で、パブロフのレスポナントテクニック

(古典的条件付け) に対し、スキナーにより系統的に始められたオペラントテクニック (道具的条件づけ) を基礎とした行動の分析方法である。金子氏の方法はオペラントテクニックであるが、結果をだすのに時間がかかり、あまりやる人がいない。行動分析学の応用として、行動遺伝学、行動薬理学、行動毒性学、行動催奇形成学、行動内分泌学、行動経済学、応用行動分析、応用実験行動分析があり、応用実験行動分析が金子氏の立場である。

行動変化測定テストバッテリー

活動量、運動機能、知覚、学習記憶を測定する種々の実験装置をスライドで紹介。

24 時間連続実験

現在金子氏がトライ中の実験方法。実験者が動物に干渉しないで、動物の行動を観察する方法を考えている。カメラの設置はしているが、えさはどうするか、自分で体重計に乗るように訓練できないか、等々。実験装置を考案するのが面白く、動物飼育実験室での挑戦はまだ続く。

明確な成果はなかなかあげられないが、標準となるデータを蓄積し、“ふつう”をしめすものをできるだけたくさん集めることも学問的貢献であると考えている。

(松本)

第 14 回 小松報告：「遊び心」をはぐくむ保育・子育て ～白梅幼稚園の実践をもとに

今回の研究発表は、小松、金田 (元教員)、松本、高田、山路千華 (元教員) 各氏と白梅幼稚園の共同研究の内容について、その一端を紹介したものであり、現在、白梅で行われている保育・教育に関する研究として非常に興味深いものであった。また、子ども学部が始まり、短期大学時代から比べると多様な研究分野の教員が加わることによって、ともすれば見落としがちになる「白梅の保育」が大切にしてきたことをあらためて認識すること

ができる研究会でもあった。

具体的な研究対象としては「遊び心」が取り上げられた。単に「遊ぶ」だけではなく、「遊び心」をはぐくむことが、その後にどのような影響を与えているのか考察し、同時に、大人になって、いつの間にか忘れていく「遊び心」が、子育てや生活場面において、とても大切なものであることを示してくれる内容となっていた。

白梅幼稚園の卒園生が親となり、その子を白梅幼稚園に入園させている人を対象にした聞き取り調査からは、「幼稚園では遊んだ思い出しか残っていない」、「みんなと一緒にと強要されたことがなく、ありがたい」といったものがあげられた。また、母親が入院していたとき、父が作ってくれた弁当に白いご飯にタラコが一つだけだったのを見て、「俺の弁当はこいのぼりだ」と発言し、自分なりに楽しんで受け止めた経験、そしてそれに対して先生も周りの子どももその遊び心に乘ってくれたという経験が紹介された。そういう園だから我が子も入れたいと思ったとのことである。幼児期に遊び心がはぐくまれた経験が、大人になっても大切な記憶として残っていることが分かるエピソードだ。

実践の観察記録から、「遊び心が育つ」保育場面とは、指示やうながしを行う保育者の側に「遊び心」があることを見出している。たとえば、わらべ歌を使って靴の片づけをうながす「歌いかけ」に対して、歌い返した子どもの反応を遊び心で受けとめる保育者の姿、遊びに入りたいと思っ

ていろいろと働きかける子どもを「ジュース屋さんになって届けてくれたよ」と見たてて、遊びの発展として遊びの輪の中に入れてあげる姿、なぞかけ風に「めちやめちやはやった?」と問い掛け、子どもに色々なものを探しに行かせる姿、お弁当の時間になっても虫さがしに夢中になっている子どもたちが自分で区切りをつけるまでその遊びを保証する姿などが取り上げられた。

が、今の生活にどのようにつながっているのかを検討することによって、「遊び心」を持ちながら、現在の小学校の学習を楽しむ様子や、親自身が遊びを大切にする姿勢が身についたことが見出されていた。子どもたちには、ひとりひとりの思いが尊重され、多様な遊びがとことん保証されたという記憶が残っていた。「やりたいことを十分にのびのびとやらせてもらえてよかったと本人が懐かしがっています」という親の記述もある。多くの子はプレイデイの記憶が一番残っている思い出であったが、このときの遊びは、プレイデイが終わった後も園の生活の中では続けられ、発展させられていた。その経験を通し、小学校に入っても、習ったことを自分なりに発展させたり、工夫を加えたりする姿が見出された。親の言葉の中には、「地味だとも思うこともあったが、子どもが主体であるべきだという思いに変わった」というものがあった。単純に遊んでいるようにみえるが、そこから様々なことを工夫し、発展させる力が自然と身についていることが示される例と言えるだろう。

こうして、幼稚園で「遊び心」がはぐくまれることが、後の子どもたちの生活ばかりでなく、親を中心として子どもを取り巻く大人たちにも、生きることを楽しむ力の大切さを気づかせてくれることが示されることによって、単に「遊ぶ」ことの大切さを知識として受けとめるのではなく、生活の中に取り入れていけるようになることが大切であることを学ぶ研究会のひとつときであった。

(多喜乃)

第15回 中島報告「ドライサー研究——短編小説の手法と内容」

中島氏は、言語表象と人間への興味から「文学とは何か」に、アメリカという人工国家の地理・歴史・政治への関心から「アメリカとは何か」に関心が向き、アメリカ文学研究にはいった。その背景には、幼少期からの地図マニアで、地図をみて現実の地形を想像し飽きることがなかったことがある。地図という記号から現実を想像する楽し

さが、言語という記号により表象された世界を想像するリアリズム文学への道につながった。

批評界においては、20世紀以降、モダニズム・構造主義・ポスト構造主義という変遷のなかで、記号＝内容は自明のものではなく恣意的なもの、と捉えることが主流になっている。中島氏はしかし、あくまでも記号（シニフィアン）は内容（シニフィエ）を模倣（ミメシス）する、と読みたいたとする。

まず、アメリカ文学の大きな流れをみると、19世紀国家建設時代はメルヴィル『白鯨』に代表されるロマンティシズムの時代であった。19世紀西部開拓時代は新しい土地を発見しそこにあるものを書いていくリアリズム文学であり、マーク・トウェイン『ハuckleベリー・フィンの冒険』がある。1890年フロンティアが消滅する。リアリズムと関わりの深い自然主義文学は1890年代—1910年代であり、セオドア・ドライサー『アメリカの悲劇』はここに位置づく。1920年代以降はモダニズム。第一次大戦を契機に、科学の進歩が人間の幸せに通じることが信じられなくなり、文学の転換がうまれる。ヘミングウェイ『老人と海』に代表されるロスト・ジェネレーションの作家が活躍。1930年代は、スタインベック『怒りの葡萄』のようなプロレタリア文学の時代、赤旗と星条旗が共にあがった珍しい時期であった。1950年代以降は、これまで脚光を浴びることの無かった黒人、女性、ユダヤ人などのアイデンティティ文学の時代である。かつての人種のるつぼから、色々なものが入っているが、それぞれの原型は保たれているサラダボールへの変化である。

このような文学の流れに対応し、批評基準はシフトしてきた。1930年代の批評基準はリアリズムであり、ドライサーの評価は高かった。1950年代以降はニュー・クリティシズムが登場する。評価基準はモダニズム、作品を世界の反映とみるのではなく、独立した芸術作品としてみようとするもので、ドライサーは批判され、ウィリアム・フォークナーが脚光を浴びようになる。絶版と

なっていたフォークナーの難解な小説が、1950年ノーベル文学賞を受賞する。

モダニズムの原理は、複雑な現実を模倣では描けない、人間の認識のあり方に現実が宿っている、というものである。中島氏は、モダニズムはアメリカの悪しき現実を隠蔽するものであり、ドライサーはアメリカの良いところも悪いところも描いたアメリカを代表する作家だ、と主張したいとする。

ドライサーは、『シスター・キャリー』『アメリカの悲劇』など8編の長編小説を書いている。難解な文体であり、新批評に嫌われた。中島氏の学生時代は、これらの長編を読むことで終わったという。

また、ドライサーは生涯31編の短編小説を書いている。しかし、ドライサー研究は長編小説に集中してきた。中島氏は近年ドライサーの短編に注目し、現在、『聖コロンバと川』の翻訳・解釈を試みている。

自然主義文学は、人間は遺伝と環境によって決定されるとする環境決定論を文学に応用したものである。そこでは多くは三人称の語りが採用される（全知の語り）。これに対し、モダニズムでは一人称の語りが増える。ドライサーは、ヘンリー・ジェイズが編み出した心理的リアリズムの手法を語りにいれこもうと「自由間接話法」の手法を試みている。

自由間接話法とは三人称の語りの中にありながら登場人物の意識をまるで一人称の語りのように語る手法である。ドライサーは短編小説の中で自然主義特有の三人称全知語りと自由間接話法の融合を試みながら、自然主義における効果的な語りの手法を探究していた。

（松本）